

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.247

2013年12月

第9回名古屋大学ホームカミングデイを開催



目次

●ニュース

第9回名古屋大学ホームカミングデイを開催	3
あいちサイエンスフェスティバル2013を県内全域で開催	7
第5回AC21学生世界フォーラムを開催	8
地震防災訓練を実施	9
平成25年秋の叙勲受章者決まる	10
第42回経営協議会を開催	10
豊田全学同窓会会長がNCC及びITbMを視察	11
丹羽宇一郎氏に本学名誉博士の称号を授与	11
山本理事が第8回日中長会議に出席	12
渡辺理事が第3回日本・北アフリカ学長会議等に出席	12
日本留学フェア2013を開催	13
平成25年度日本数学コンクール表彰式を挙げる	13
平成25年秋期 Weekend TOEFL 講座及び Survival Japanese Weekend Program 開講式を挙げる	14
経済学部4年鈴木亜由子さんのメダル獲得記念プレートの上掲式を挙げる	14

●知の未来へ

第3の固体が切り開く新しい強相関物質	15
出口 和彦 (大学院理学研究科助教)	

●知の先端

ナノ材料がもたらす革新的エレクトロニクスと省エネルギー製造技術	16
大野 雄高 (大学院工学研究科量子工学専攻准教授)	

●部局ニュース

ヤングリーダーズプログラム創設10周年記念式典を挙げる	18
建築学科創設50周年記念事業を開催	19
第2回農場講演会を開催	19
国際セミナー「現代カンボジアの社会経済発展への挑戦」を開催	20
キャリア・ガイダンス「国際機関で働くには」を開催	20
国際シンポジウム「世界と対話するー世界が日本を見る眼・日本が世界を見る眼」を開催	21
教育研究プロジェクト、合同研究会を開催	21
三重県松阪市と連携協定調印式等を挙げる	22
ノーベル賞緊急講演会「ヒッグス粒子の正体に迫る」を開催	22
ICCAE 第14回オープンフォーラムを開催	23
第94回防災アカデミーを開催	23
第30回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催	24
第27回企画展「本物？作り物？ロウ細工？教育標本ムラージュ」を開催	24
第3回地球教室を開催	25

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成25年10月16日～11月15日

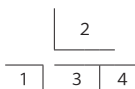
●イベントカレンダー

●ちょっと名大史

四高戦と第八高等学校庭球部への応戦状	32
--------------------	----

第9回名古屋大学ホームカミングデイを開催





- 1 開催あいさつをする豊田全学同窓会会長
- 2 国際交流貢献顕彰授与式の様子
- 3 国際交流貢献顕彰を授与されるアルタンツォヤ氏
- 4 総長特別表彰を授与された鈴木亜由子さん

第9回名古屋大学ホームカミングデイが、10月19日(土)、東山キャンパス及び大幸キャンパスにおいて、全学同窓会の協力のもと開催されました。

当日は、朝のうちは雨が心配されましたが、その後、徐々に快復し、一日を通して、同窓生や在学生の家族、近隣住民の方々を中心に3,500名を超える参加がありました。

今年度は、文部科学省が実施する「世界トップレベル研究拠点プログラム」に採択された「トランスフォーマティブ生命分子研究所 (ITbM)」が、今年度より研究を開始したことから、「地域と大学で考える『生命 (いのち) の科学』」をメインテーマとし、大学院理学研究科を中心部局として開催しました。当日の行事運営には、名大祭本部実行委員会や水泳部、陸上部に所属する多くの学生も加わり、教職員と力を合わせ、総合案内、駐車整理などの業務にあたりました。

■名古屋大学の集い

豊田講堂においては、周年記念同窓生(卒業後10周年、20周年、30周年、40周年、50周年を迎えた同窓生)を中心

とした多くの関係者の参加のもと、教育学部卒業生である夏目みな美中部日本放送アナウンサーの司会進行により、「名古屋大学の集い」を開催しました。

第1部では、初めに濱口総長、豊田章一郎全学同窓会会長からのあいさつがあり、次いで、ホームカミングディレクターである伊藤義人全学同窓会代表幹事から活動報告がありました。続いて、名古屋大学国際交流貢献顕彰授与式に加え、名古屋大学総長特別表彰授与式、さらに、名古屋大学基金により奨学金を受けている、G30学部奨学生2名による日本語の講演も行われました。なお、国際的人材群創出のさらなる促進を目的とする名古屋大学国際交流貢献顕彰においては、アルタンツォヤ ジグジドスーレン氏、洪庚明氏、ナンダン ラフマツト氏に表彰状と記念品が授与されました。

また、顕著な活躍を行った学生に対して行う名古屋大学総長特別表彰においては、今年7月に大学生の世界選手権「第27回ユニバーシアード競技大会」に日本代表として出場し、10,000m 金メダル、5,000m 銅メダルを獲得した、





陸上競技部所属の経済学部4年鈴木亜由子さんに表彰状と記念品等が授与されました。

第2部では、ヴァイオリニストの諏訪内晶子氏をソリストに迎え、兵庫芸術文化センター管弦楽団によるコンサートを行いました。

名古屋大学基金に対する高額寄附者（100口以上）の方には、ご支援に対する感謝の意を表すため、第1部、第2部を通じて、指定席を用意しました。また、周年同窓生には卒業年次別で座席のブロックを用意しました。各ブロックで旧交を温める姿が見受けられました。

■学術講演「世界を変えるバイオ分子」

シンポジオンホールでは、下村 脩本学特別教授を中心とした学術講演を開催しました。経済学部卒業生の若狭敬一中部日本放送アナウンサーの司会のもと、ノーベル化学賞を受賞された下村特別教授による、緑色蛍光タンパク質の発見の経緯から発光の仕組みなどについての講演がありました。その後、伊丹健一郎トランスフォーマティブ生命分子研究所拠点長、吉村 崇同研究所教授による講演が行われました。会場は多くの人で賑わい、総勢400名を超える参加がありました。



■学術講演関連企画「分子で世界を変える：トランスフォーマティブ生命分子研究所（ITbM）とは」

シンポジオンと隣接するホワイエにおいて、ビデオ上映やポスター展示によりトランスフォーマティブ生命分子研究所を紹介しました。学術講演に関連し「ひかり」「ひかる」をキーワードにした実験体験コーナーも設け、分子でライトをつくる実験などを通して研究を身近に感じていただく機会となりました。また、学術講演の様子をスクリーンで上映し、会場に入りきれなかった方にも講演を楽しんでいただくことができました。

■体験企画「名大ウォーキングツアー」

島岡 清本学名誉教授の監修のもと、ウォーキングで健康づくりを意識しながら、ツアー形式で東山キャンパス内を散策しました。豊田講堂をスタートし、赤崎記念研究館やノーベル賞展示室など、東山キャンパス内にある教育研究施設や見どころスポットを、学生のツアーガイドが案内しました。

■体験企画「サイエンスクラフトで遊ぼう☆」、「親子ふれあいサッカー教室」

野依記念学術交流館1階カフェスペースにおいて、本





学の理系女子学生で構成されるコミュニティ「あかりんご隊」による子ども向けの科学実験体験企画を実施しました。

陸上競技場では、名古屋グランパスのコーチによるサッカー教室を行い、サッカーの基本プレーやミニゲームを親子で楽しんでいただきました。

■体験企画「名古屋大学ミュージアム活性化プロジェクト (NUMAP)」

豊田講堂前広場において、学生・若手研究者が中心となって「名大再発見！～キャンパスは大きなミュージアム～」が開催されました。本学を大きなミュージアムに見立て、学内の研究・自然史・歴史遺産に注目したツアーや展示を行いました。

■大幸デイ

ホームカミングデイは、東山キャンパスだけではなく、大幸キャンパスにおいても開催しています。大幸キャンパスでは、午前中に市民公開講座「健やかなシニアを目指して、からだときもちの準備を！」を、午後には大学院医学系研究科（保健学）が、講演・シンポジウム「小児緩和ケアを考える～その意義と実践～」を開催しました。



■多彩な講演会・展示の数々

メインテーマに沿った記念講演・展示に加えて、各学部・大学院が主催する催しも数多く行われました。

大学院教育発達科学研究科は、名古屋大学の集いで司会を務めた浦口アナウンサーと、テレビアナウンサーの仕事について対談する企画を行いました。

大学院法学研究科は、森 英樹名誉教授による「今、日本の憲法は」と題した講演会を行いました。

大学院工学研究科は、鏡ヶ池東側の「劣化橋梁施設 N2U-BRIDGE」の見学及び説明会を実施しました。

豊田講堂ホワイエでは、名古屋市（東山動植物園 東山再生フォーラム特別企画）との共催で「伊藤圭介生誕210年記念展－東山に眠る本草学の宝－」が開催され、本草学の代表人物である伊藤圭介氏に関わる貴重な資料が特別に公開されました。また、シンポジオンでは伊藤圭介氏についての講演も行われました。

博物館では、企画展「本物？作り物？ロウ細工？教育標本ムラージュ」や、電子顕微鏡で身近な植物・動物を観察する「ミクロの探検隊®」が行われました。また、西側キャンパスにある野外観察園も公開され、多くの人が訪れました。



1	2	5	6
3	4	7	

- 1 講演する下村特別教授
- 2 学術講演会の様子
- 3 ITbM 紹介での実験体験コーナーの様子
- 4 体験企画「名大ウォーキングツアー」の様子
- 5 体験企画「あかりんご隊科学実験」の様子
- 6 体験企画「親子ふれあいサッカー教室」の様子
- 7 博物館企画「ミクロの探検隊®」の様子



■販売コーナー

豊田講堂南側ピロティの販売コーナーでは、本のリユース市、農産物の販売、大学生協による名大グッズ等の販売が行われました。本のリユース市は学術書など通常は手に入りにくい図書が安価に入手でき、今年も多くの方が本を買い求めていました。農産物の販売では、フィールド科学教育センター東郷フィールドの大地で育てられた新鮮野菜や、米が販売されました。

■同窓会、保護者等対象企画行事、施設公開

各学部・大学院では、同窓会関係行事も行われました。講演会等は、同窓生だけでなく在学生の保護者等、一般市民の方々にも開放して開催されました。その他、同窓会総会・懇親会など同窓会ならではの行事も数多く行われました。

また、教育・研究をはじめとする現在の本学の取り組みをご理解いただくため、保護者等を対象とした企画行事も開催されました。14の学部・研究科において、教育目標・教育課題及び進路・就職状況等に関する説明や教員と保護者との面談形式での相談会など、部局ごとに趣向を凝らした内容で行われました。

保護者等対象企画行事に参加した方全員に、大学生協の

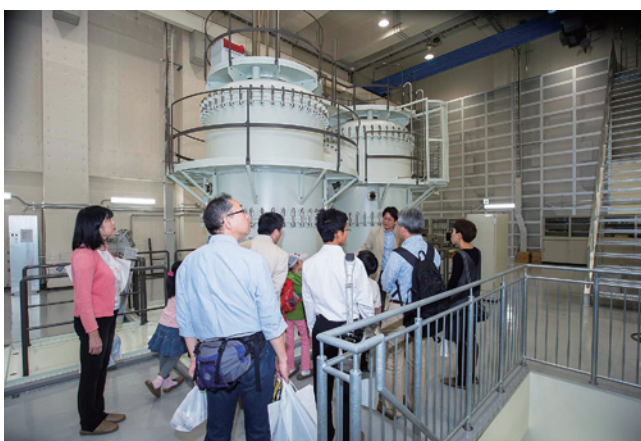


無料食事券を配付し、日頃、学生が食べている食事を体験してもらいました。

なお、今年は同窓生・在校生を対象にした就職支援についての企画も実施されました。学生相談総合センター就職相談部門や大学院環境学研究科がそれぞれ実施した座談会では、在學生と企業や行政へ就職した同窓生が、社会人の生活や、大学時代の研究と今の仕事の関係などについて語り合いました。

さらに、超高圧電子顕微鏡施設、2008年ノーベル物理学賞・化学賞展示室、情報基盤センター、野依記念物質科学研究館ケミストリーギャラリー、赤崎記念研究館展示室では、施設公開や見学ツアーが開催されました。

参加者には、普段見ることのできない大学の設備、施設に触れることで、今の本学を直に感じてもらうことができました。



1	2
3	

- 1 農作物の販売の様子
- 2 本のリユース市の様子
- 3 超高圧電子顕微鏡施設見学の様子

あいちサイエンスフェスティバル2013を県内全域で開催



グローバル人材養成について語る総長



県独自の科学技術施策を紹介する大村知事

あいちサイエンスフェスティバル2013が、9月28日(土)から11月4日(月)までの間、愛知県全域の各会場において開催されました。同フェスティバルは、あいちサイエンス・コミュニケーション・ネットワーク実行委員会の愛知県内18機関イベントを中心に150企画が集合したもので、本学が事務局を担い、毎日サイエンスイベントが行われました。

3年目となる今年は、三井住友銀行 SMBC パーク栄の参画のもと、会期前から特別展示を実施しました。物質科学国際研究センター提供のマリー・キュリー業績ポスター展をはじめ、五箇公一国立環境研究所首席研究員らによる虫マニア CG イラスト展や、名古屋造形大学・名古屋市立大学・豊橋市自然史博物館との連携によるサイエンスイラストレーションの世界展、名古屋市科学館・名古屋市東山動植物園・基礎生物学研究所・小牧市などとの連携による振り返り展示「国際植物の日2013」を常設し、フェスティバルの情報センターとして開設しました。

毎週土曜のメイン企画となる対話型講演会は、9月28日(土)の三井住友銀行 SMBC パーク 栄において、濱口総長の記念講演からスタートしました。10月26日(土)に大村秀章愛知県知事、11月2日(土)に元本学理事・副総長である山本進一あいち生物多様性2020推進委員長、11月4日(月)に東 垣海洋研究開発機構地球深部探査センター長が講演しました。また、第2拠点の蒲郡市生命の海科学館での週例メイン企画には9月28日(土)に渡邊誠一郎環境学研究所教授、10月12日(土)に小柴昌俊平成基礎科学財団理事長、11月2日(土)に中尾裕則高エネルギー加速器研究機構准教授が講演しました。さらに、10月6日(日)には坪木和久地球水循環研究センター教授らによる気象観測気球の成層圏到達映像公開シンポジウムも開催しました。

会期中の月曜から金曜の夜には、実行委員会企画として産学官連携推進本部主管により例年どおり名古屋市・栄地区で対話イベント「さかえサイエンストーク」を開催しました。週替わりのテーマと曜日替わり会場により多様な市

民の参加を目指し、25名のゲストが登場し、第1週は本学、岐阜薬科大学などからメディカル、第2週は各機関実行委員である学芸員によるキュレーターズ、第3週は本学、北海道大学などからバイオ・環境、第4週は愛知工科大学などからものづくり、第5週は本学、愛知県立大学などから環境・生物多様性のテーマで開催しました。特に第4週は愛知県産業労働部、第5週は愛知県環境部と連携し、土曜のメイン企画との統一テーマで展開しました。その他、本学からはリサーチ・アドミニストレーション室主催の URA 研修を公開セミナーとして3回行ったほか、トランスフォーマティブ生命分子研究所や素粒子宇宙起源研究機構、ビジネス人材育成センター等もイベントを行いました。

本フェスティバルは「JST ネットワーク形成地域型」と「あいち森と緑づくり環境活動・学習推進事業」により展開しており、年度末に向けてポスト企画も展開されます。



蒲郡市で講演する小柴氏

第5回 AC21学生世界フォーラムを開催

第5回 AC21 (国際学術コンソーシアム) 学生世界フォーラムが、10月16日(水)から22日(火)までの7日間、上海市の同済大学で開催されました。同フォーラムは、2年に1度、AC21のメンバーの大学において、主に学部生を対象として開催される AC21の主要なイベントです。5回目となる今回は、「持続可能なモビリティと未来都市」をテーマに開催され、13の大学から本学の学生4名を含む38名と、同済大学から36名の学生ボランティアが参加しました。

初日の夜に開催された歓迎レセプション及び2日目朝に行われた開会式には、同フォーラム開催に合わせて、同じ会場で開催された AC21運営委員会・総会参加者(各メンバー大学の学長・副学長・国際担当職員)も出席し、参加学生と歓談するという貴重な機会となりました。

開会式では、ユ・ズオピン同済大学自動車研究科長、渡辺理事及びリー・ゼンユー同済大学国際交流協力部長か



運営委員会の様子

らのあいさつがありました。その後の6日間のプログラムは、テーマに基づいた講義や、上海自動車博物館や上海博物館などの見学、グループディスカッションやグループ発表、上海市内散策など大変有意義な内容でした。また、夕食時には、参加学生が出身国の民族舞踊や歌、武術を披露するなど、お互いの文化に触れる機会もありました。

16日(水)と17日(木)に開催された AC21運営委員会・総会では、AC21の運営や今後の AC21のイベントの開催方法など様々な議題について話し合いました。その中で、今春、AC21の初めての試みとして実施した「AC21国際スクーリング」を、今後も AC21のイベントとして取り入れることが決定しました。また、メンバーの大学からの積極的な申し出により、2014年から2017年までの AC21のイベントの主催校も決定し、今後、AC21の活動のさらなる拡充・発展が期待されます。



集合写真

地震防災訓練を実施

地震防災訓練が、10月29日(火)、東山地区、鶴舞地区ほか本学全キャンパスにおいて実施されました。本学の防災訓練は、毎年、新たな課題を加えてレベルアップしており、今年も、全員対象の一斉避難訓練、自衛消防隊の活動訓練、災害対策本部の図上訓練の3点を主要な課題として取り組みました。

一斉避難訓練は、東海・東南海地震など震度6強の強い揺れが長く続くことを想定して実施しました。午前11時30分に緊急地震速報が放送され、続いて地震の音が2分間流されて揺れの継続を知らせました。その間、教室では机の下で頭を守るなど、全員がそれぞれの場所で安全を確保する行動を行い、揺れが収まった後に屋外の一次避難場所に避難することとして、最後に点呼などによる避難者数の確認を行いました。なお、屋外の安全確保のため、東山キャンパスでは避難訓練中の車両の出入構や移動を禁止としました。

今年も小雨の中での避難訓練となったため、建物の出口での混雑も見られましたが、授業中の教員や自衛消防隊員の誘導により安全に避難が行われました。自衛消防隊の働きにより、10～20分で避難は完了し、12時30分までには全学の屋外避難者数の集計も完了しました。全体で約7千名の避難者が確認され、活動中の自衛消防隊員と諸事情で安全姿勢のみの訓練を行った人を加えると、1万名を超える参加がありました。

2点目の自衛消防隊の活動訓練は、ここ数年にわたり整備してきたブロック防災体制に基づいて実施しました。全学自衛消防隊は、災害対策本部の設営と各ブロックからの情報の集約に加えて、負傷者の対応に当たる救護センターと、被災建物の安全性を確認する応急危険度判定センターの開設訓練を実施しました。これらのセンターは全学自衛消防隊のもとで、保健管理室や施設管理部の専門の職員と学内の関連教員が協力して緊急対応を行う体制を確保するものです。一方、ブロック自衛消防隊では、各建物の建物



一斉避難訓練の様子

隊が一斉避難訓練に取り組む一方で、ブロック本部隊ではブロック本部の設営を行い、非常電源やLED照明の設置、各建物消防隊からの情報集約、トランシーバによる全学本部への報告など一連の訓練を実施しました。アイソトープ関連施設の被災状況集約の訓練も今年から新たに実施するなど、事前の被害想定に基づいた各建物・ブロックの状況に応じた訓練となっています。

3点目の全学の災害対策本部訓練については、午前には本部長である総長と本部長が各ブロック訓練を視察し、学内の状況を確認した上で、午後から実際の想定で図上訓練を実施しました。事前に作成したチェックリストに基づいて多数の項目の確認を進める本番さながらの図上訓練となりました。

本学のような大規模組織で、地震災害などの緊急対応を確実に行うためには、体制整備と一人ひとりの意識向上が必須です。そのために今回の訓練の結果を活かし、継続的な防災安全の向上に取り組んでいきます。



図上訓練の様子

平成25年秋の叙勲受章者決まる

－本学関係者6名が喜びの受章－

平成25年秋の叙勲の受章者が発表され、本学関係者では次の方々が受章されました。

瑞宝章は、国家又は公共に対し功労のある方のうち、公務等に長年にわたり従事し、成績を挙げた方に授与されます。

【叙勲】

[教育研究功労 関係]

瑞宝重光章

岸 義人 特別教授（農学部）
ハーバード大学名誉教授
文化功労者

森 正夫 名誉教授（大学院文学研究科）
元名古屋大学副総長・文学部長
元愛知県立大学長

森 昭夫 名誉教授（大学院法学研究科）
元名古屋大学法学部長・国際開発研究科長
元上智大学地球環境研究所長

瑞宝中授章

潮木 守一 名誉教授（大学院国際開発研究科）
元名古屋大学教育学部長・図書館長
元武蔵野女子大学現代社会学部長

[警察功労・教育研究功労 関係]

瑞宝中授章

勝又 義直 名誉教授（大学院医学系研究科）
元名古屋大学大学院医学系研究科長
元科学警察研究所長

三谷 法雄 名誉教授（言語文化部）
元名古屋大学言語文化部長
愛知文教大学名誉教授

第42回経営協議会を開催

第42回経営協議会が、10月24日（木）に開催されました。

会議では、濱口総長からあいさつの後、非常勤理事の再任、中期目標・中期計画の変更、人事関係諸制度の見直し、平成25年度業務達成基準適用事業について、総長、各担当理事及び副総長から説明が行われ、審議の結果、了承されました。

次いで、平成24年度に係る業務の実績に関する評価結果、平成26年度に実施する大学機関別認証評価の申請、名古屋大学基金の状況、平成26年度概算要求、平成24事業年度決算に係る財務分析、平成25年度国際プログラム群入学試験の結果、採択事業の概要、海外キャンパス構想、第9回ホームカミングデイについて報告が行われました。

外部委員の方々からは、人事関係諸制度の見直し、名古屋大学基金の状況、平成24事業年度決算に係る財務分析及び海外キャンパス構想について意見交換が行われ、貴重な意見が寄せられました。

なお、同日には第15回総長選考会議も開催され、学内委員の紹介、総長選考における投票有資格者等の取扱いについて審議されました。



会議の様子

豊田全学同窓会会長がNCC及びITbMを視察

豊田章一郎名古屋大学全学同窓会会長は、10月18日（金）、平成25年度に新たに設置されたナショナルコンポジットセンター（NCC）及びトランスフォーマティブ生命分子研究所（ITbM）を視察しました。

まず最初に、ナショナルコンポジットセンターにおいて、石川隆司同センター長の説明により、次世代自動車



視察の様子

構造部材として期待される炭素繊維／熱可塑樹脂複合材（CFRP）の成形技術を開発研究するために導入された、国内最大級の大型プレス機を中心とする「大型複合材プレス成形システム」及び航空機の翼や風車の耐雷テストが可能な「耐雷試験装置」を視察しました。

豊田会長からは、今後の課題や実用化の時期等についての質問がありました。

次に、トランスフォーマティブ生命分子研究所において、伊丹健一郎同研究所拠点長から組織の概要についての説明を受けた後、実験室を視察されました。豊田会長は、理学系及び生命農学系等の分野を超えた環境で、若い世代の研究者が活発な研究を行っていることに特に関心を示していました。

丹羽宇一郎氏に本学名誉博士の称号を授与

丹羽宇一郎氏に対する名古屋大学名誉博士称号授与式が、10月19日（土）、総長応接室において、挙行されました。

丹羽氏は、昭和37年3月に本学法学部を卒業後、伊藤忠商事株式会社に入社、同代表取締役社長、会長、相談役等を歴任し、国内外の経済発展に寄与しました。また、社団法人日本経済団体連合会の農政問題委員会共同委員長、税



丹羽氏（左）と総長（右）

制委員会共同委員長、日タイ貿易経済委員会共同委員長等を務め、わが国及び海外の経済発展の推進、企業の価値創造力の強化、個人や地域の活力の向上に貢献するほか、内閣府の経済財政諮問会議議員や成長力底上げ戦略推進円卓会議議員として、国家行政の中核に関わる重責も担ってきました。

一方で、丹羽氏は、平成16年4月から平成22年6月までの間、本学経営協議会委員として、経験豊富な企業人の立場から、大学の果たすべき役割、経営に関する重要事項、大学における人材養成、社会貢献のあり方等について助言を行ってきました。また、本学全学同窓会副会長（平成14年10月就任）及び関東支部支部長（平成15年3月就任）、法学部同窓会関東支部支部長（平成12年5月就任）として、全学同窓会及び法学部同窓会の発展に現在まで貢献しています。

名誉博士の称号授与にあたり、濱口総長から、丹羽氏のこれまでの広範かつ多岐にわたる永年の社会貢献活動及びそれに対する国内外からの高い評価は他に代え難いものであり、また、豊富な経験に基づき大所高所からの貴重な助言を得ることは、本学の教育研究活動の活性化等に資するという意味において極めて意義深いとの言葉がありました。

山本理事が第8回日中学長会議に出席

山本理事が、11月1日(金)、アモイ大学において開催された第8回日中学長会議に出席しました。本学からは、山本理事、宇田川上海事務所長らが出席しました。日中学長会議は、2000年に第1回会議が開催されて以来、2年に一度、日本と中国の大学が交互にホストして行われています。



発表する山本理事

今回、日本からは、国・私立併せて22機関、中国からは、25機関から学長等代表者が出席し、開会式典、基調講演のほか、「世界の一流大学とは」、「中日高等教育の相違と共通点について」、「中日大学間の交流提携活動における長所と短所について」という3テーマについて、参加大学によるプレゼンテーションが行われました。

山本理事からは、「世界の一流大学とは」のセッションにおいて、様々な定義や要件はあるが、工学の研究者としてのアプローチから、優れた熱意ある教員を一定以上配置できることが、最低限必要であると強調しました。

閉会式では、日中両国の代表から会合のまとめが報告されるとともに、学生代表より、今回初めて開催された学生セッションの成果が発表されました。本学からも、学生2名が参加しました。

また、次回ホスト校の九州大学が、福岡の魅力を紹介するとともに、第9回会合を九州大学で行う事を約束して閉会となりました。

渡辺理事が第3回日本・北アフリカ学長会議等に出席

渡辺理事は、10月22日(火)、23日(水)の両日、モロッコのモハメドV世大学アグダル校において開催された第3回日本・北アフリカ学長会議及び日本留学説明会に出席しました。日本・北アフリカ学長会議は、筑波大学の主催で開催し、本学からは渡辺理事他2名が参加しました。

同学長会議では“Mobility and Academic Networking”



会議の様子

をテーマに、日本と北アフリカ諸国(エジプト、リビア、チュニジア、アルジェリア、モロッコ、モーリタニア)双方向の学術交流、学生・教職員などの人的交流を促進するための具体的施策及びその基盤となる大学間ネットワークの構築と活用について議論が行われました。また、昨今の我が国におけるグローバル人材へのニーズに加えて、今年6月に横浜で開催されたアフリカ開発会議で打ち出されたアフリカの産業人材育成のための支援策「安倍イニシアティブ」を使った日本と北アフリカ、さらにアフリカ諸国のグローバル人材育成を目指した民間企業、国際機関、NGO等との連携強化や、大学間ネットワークの北アフリカからアフリカ全体への展開についても議論されました。

同会議はこれまで2010年にチュニジア、2012年に日本で開催され、日本と北アフリカの大学の学術活動の相互理解、2011年の東日本大震災と中東・北アフリカにおける政変後の「新しい社会づくり」のために大学がどのような役割を果たすべきかについて議論を交わし、双方の信頼関係と連携を深めてきました。今回は、上記の背景の中で具体的な行動につながる活発な議論が行われました。

日本留学フェア2013を開催

日本留学フェア2013が、11月9日(土)、ウズベキスタンのタシケント市において、ウズベキスタン・日本人材開発センター(UJC)との共催により開催されました。

今回が3回目の開催となるこのフェアは、国際化拠点整備事業(グローバル30)の一環として、ウズベキスタンに海外大学共同利用事務所を持つ本学が、ウズベキスタン文



タシケントでの本学ブースの様子

化・芸術フォーラム基金、ウズベキスタン高中等教育省、在ウズベキスタン日本大使館及び名古屋大学同窓会ウズベキスタン支部の協力を得て開催したもので、本学の他に、北海道大学、国際大学、慶応大学、九州大学、立命館アジア太平洋大学(APU)、筑波大学、早稲田大学の8大学が参加しました。

まず、日本側を代表して渡辺理事から、ウズベキスタン事務所は、本学のみならず広く日本国内の大学とウズベキスタンとの学生交流等を推進するために設置され、ウズベキスタンから日本へ留学する場合の窓口として重要な役割を担っているなどの説明がありました。当日は晴天に恵まれ、1,400名を超える高校生・大学生の来場があり大盛況のうちに終了しました。

また今年も、11月11日(月)、サマルカンド市においてもサマルカンド国立大学及びウズベキスタン文化・芸術フォーラム基金サマルカンド支部の協力を得て同フェアを初めて開催し、本学の他に、国際大学、九州大学、APUの4大学が参加して、800名を超える来場がありました。

同フェアを機に、両国の一層の交流が促進されることが期待されます。

平成25年度日本数学コンクール表彰式を挙

平成25年度日本数学コンクール表彰式が、11月9日(土)、理学南館大講堂において挙

行されました。今回は、受賞した生徒とその保護者等、約100名が出席しました。

表彰式では、日本数学コンクール委員会委員長を務めている國枝理事、小島寿文愛知県教育委員会高等学校教育課



受賞者を囲んでの集合写真

課長補佐からあいさつがあった後、8月10日(土)に名古屋・大阪・三重・和歌山の4会場で行われた第24回日本数学コンクール、第17回日本ジュニア数学コンクールで優秀な成績を収めた48名及び第14回日本数学コンクール論文賞で優秀な論文を作成した8名に対し、國枝理事らから賞状、メダル及び副賞が授与されました。

続いて、日本数学コンクールのシニア大賞、日本ジュニア数学コンクールのジュニア大賞、日本数学コンクール論文賞のシニア金賞、ジュニア金賞を受賞した生徒からそれぞれ受賞の喜びと感謝の言葉が述べられました。

表彰式終了後には、問題作成に携わったコンクール実行委員の先生が、問題に対する解答とそこに辿り着く過程や考え方について、生徒と会話しながらポスターセッション形式で解説をしました。

平成25年秋期 Weekend TOEFL 講座及び Survival Japanese Weekend Program 開講式を挙

平成25年秋「期留学希望者のための Weekend TOEFL 講座」及び「Survival Japanese Weekend Program」の開講式が、11月2日(土)、挙行されました。

名古屋外国語大学から専門の講師を招き、交換留学に必要とされる TOEFL iBT のスコアアップを目指す「留学希望者のための Weekend TOEFL 講座」と、ことばの壁に



渡辺理事によるあいさつの様子

悩む留学生・外国人スタッフが日常生活で必要とされる最低限の日本語習得を目指す「Survival Japanese Weekend Program」は、本学及び三重大学を会場として、この秋からスタートしたものです。本学、三重大学及び愛知教育大学は、文部科学省の平成24年度大学改革強化推進事業に採択され、人材育成や国際化の加速的推進に寄与する取り組みを3大学で協力して検討してきました。本学の会場では、それぞれ3クラス、2クラスを開講し、本学を含む3大学の学生及び教職員から143名の応募がありました。

初回の授業に先立ち行われた開講式では、渡辺理事から開会のあいさつがあり、続いて名古屋外国語大学の亀山郁夫学長から受講者に激励のことばが贈られました。

同講座に続き、来年春には国際教育交流センター海外留学部門による「2014春期集中留学準備講座 TOEFL 対策&留学プランニング」が開催されます。これは、全学交換留学への参加を真剣に考えている本学学生のために企画されたもので、10日間の講義内容には語学授業とワークショップが盛り込まれており、異文化間コミュニケーションの基礎知識を習得したりする機会が設けられています。

経済学部4年鈴木亜由子さんのメダル獲得記念プレートの上掲式を挙

経済学部4年で陸上競技部所属の鈴木亜由子さんがメダルを獲得したことを記念するプレートの上掲式が、10月20日(日)、山の上陸上競技場で挙行されました。これは、鈴木さんが今年7月にロシアのカザンで開催された「第27回ユニバーシアード競技大会」において、金メダル(女子10,000m:32分54秒17)、銅メダル(女子5,000m:15分51

秒47)を獲得したことによるものです。

上掲式当日は、あいにくの雨模様でしたが、鈴木さん、陸上競技部部長である國枝理事、陸上競技部OB約30名、現役部員約80名、学務部職員など100名を超える関係者が出席しました。まず、鈴木さんのあいさつの後、記念プレートが陸上競技場の壁面に設置されると、陸上競技場では拍手が起り、お祝いムードに包まれました。鈴木さんを中心に設置された記念プレートを被写体として、陸上競技部OBの方々が盛んにシャッターを押す姿が見られました。上掲式終了後は、野依記念学術交流会館に会場を移し、濱口総長の出席のもと、祝賀会が開催されました。

なお、第27回ユニバーシアード競技大会出場に際して、豊田講堂前に設置されていた横断幕も陸上競技場に移設されました。

また、10月19日(土)に開催されたホームカミングデイにおいては、今回の記念プレートの設置に先立ち、鈴木さんに対して本学体育会会長である総長より、この偉業を称えるとともに今後のさらなる飛躍を願って、総長特別表彰が授与されました。



上掲式の様子

第3の固体が切り開く新しい強相関物質

大学院理学研究科助教
出口 和彦

有の物性、まして、電子間の斥力が重要になる強相関電子物性については謎のままでした。

我々の研究グループでは、図1のような構造をもつ Au(金)-Al(アルミニウム)-Yb(イッテルビウム)を組み合わせた準結晶を作成しました。この準結晶が強相関電子系としての性質を示し、様々な物理量が低温で発散し、温度を冷やせば冷やすほど絶対零度に向かって無限に大きくなる量子臨界現象が「第3の固体」特有の性質と深く関係して安定に現れることを発見しました。この現象は物質が量子臨界点という特異点に位置するときに現れます(図2)。量子臨界点は物理の様々な面で現れ、宇宙物理のブラックホールから素粒子物理のひも理論の実験の舞台としても興味を持られています。また、この特異点の近傍では超伝導や磁性に関係した新しい物性が発見されており、新しい機能性物質を生み出す可能性があります。この発見が原子配置の「規則」もパラメーターとした新物質開発・新現象探索のパラダイムシフトにつながることを期待して現在も研究を進めています。

私たちは様々な機能性物質・構造素材として「結晶」または「アモルファス」という形の固体を利用しています。原子が規則正しく等差数列的に整列している結晶は携帯電話や太陽電池に使われている半導体のシリコン、宝石のダイヤモンドなどの絶縁体、金・銀・銅などの金属があります。逆にランダムに原子が並んでいるアモルファスはガラスが身近なものです。結晶ではその性質をバンド理論で説明できるものよりも、その枠を超えて電子間の斥力が重要になる強相関電子系が基礎・応用の両面から注目を集めてきました。

シェヒトマン博士(2011年ノーベル化学賞)によって1984年に発見された「準結晶」は、図1に示すように原子配置が特殊な等比数列的な規則性(準周期性)をもち、結晶と似たような回折像が現れますが、その回転対称性は結晶では許されないものであり、どちらにも分類できない「第3の固体」となりました。発見以来、準結晶の構造については研究が大きく進みましたが、特殊な原子配置の規則を持つ準結晶ではバンド理論もそのままでは適用できないため、電子状態に起因する特

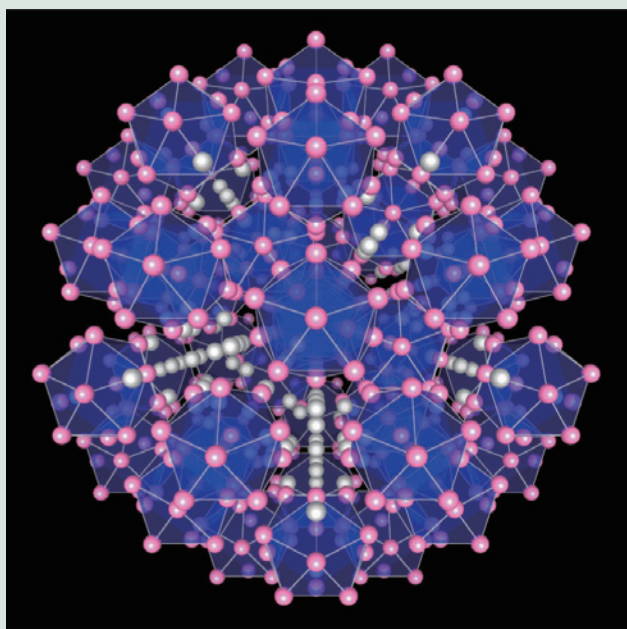


図1 Ybの原子配置のみ示した Au-Al-Yb 準結晶の構造
Ybの正20面体が準周期的な格子点上に整列している。準結晶中の原子は、特殊な規則性(準周期性)を持つ。この図では結晶では許されない5回対称性を反映した正5角形が見られる。一方、結晶では2,3,4,6回対称性のみ制限される。

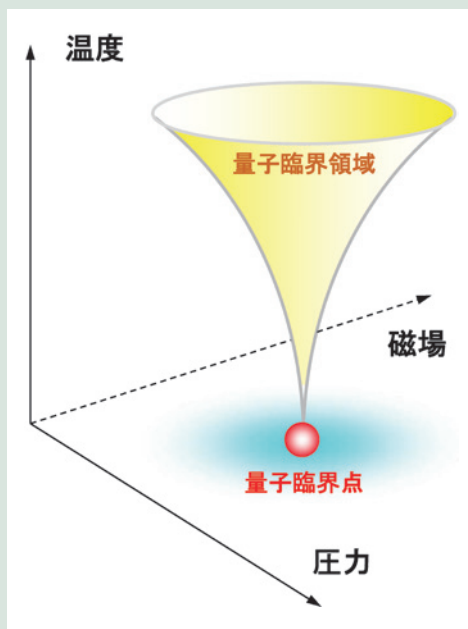


図2 物質の相図の中に現れる量子臨界点と量子臨界現象
絶対零度の量子臨界点に向かって、様々な物理量が発散し、図中の量子臨界領域において特異性が現れる現象が量子臨界現象である。通常は電子の状態をピンポイントに微調整しないと量子臨界状態は現れず、不安定な状態と考えられている。Au-Al-Yb 準結晶は常圧ゼロ磁場(普通環境)で安定に量子臨界点に位置している。

ナノ材料がもたらす革新的エレクトロニクスと省エネルギー製造技術

大野 雄高 大学院工学研究科量子工学専攻准教授

持続可能な社会の実現には、エネルギーや希少金属の消費を抑えることが不可欠ですが、一方で、便利で豊かな生活を送りたいとの人間の欲求は絶えることはないでしょう。発展しながらも、より効率的で無駄のないシステムの構築が理想的です。製造業においても、新しい機能を持ち魅力のある機器を作り出しながら、機器の省エネ化のみならず製造過程の省エネ化を実現するための技術開発が求められています。

近年、材料科学の進歩に伴って、簡単な製造プロセスで高い機能性をもつ材料・デバイスが実現できるようになりつつあります。特に、ナノ材料の場合、自己組織化という自発的に組織的な構造を作り出す現象を利用すると、ハイテクな極微細加工技術を使用しなくとも、極めて優れた電気伝

導性をもつ微細構造を実現できます。

例えば、カーボンナノチューブは、炭素でできた六員環の網を1ナノメートル (10^{-9} メートル) という非常に小さな直径で筒状に丸めた構造を持ちますが、自己組織化の代表例です。カーボンナノチューブでは電子はほとんど散乱されず、極めて高い電気伝導性をもち、また、わずかな構造の違いで半導体にも金属にもなるため、様々なエレクトロニクス応用が検討されています。何よりも、優れた界面特性をもち、印刷法や転写法などの簡単なプロセスにより、高性能デバイスを実現できます。したがって、従来の真空技術を用いた製造プロセスに比べて、飛躍的に製造過程の省エネ化が可能です。

我々の研究グループでは、これらのカーボンナ

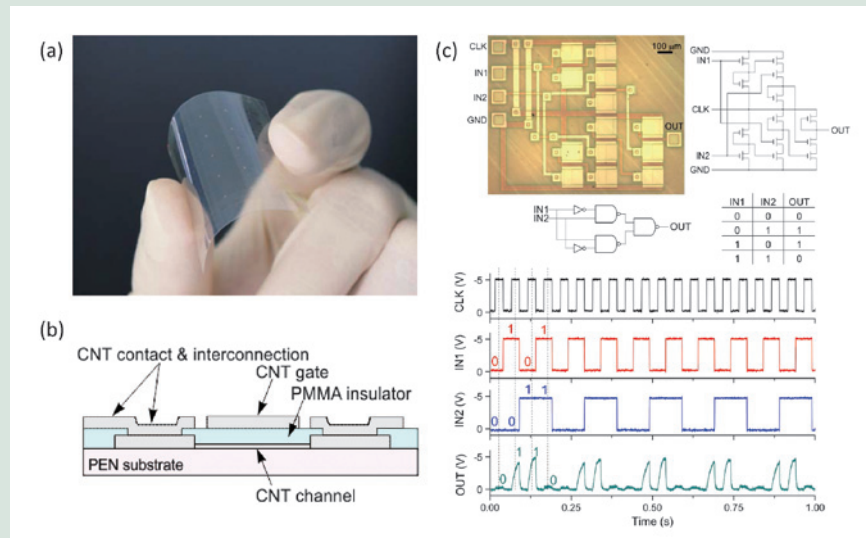


図1 全カーボン集積回路。(a) 写真、(b) 素子構造、(c) 集積回路の一例（排他的論理和）。

ノチューブの特長を活かして、新規エレクトロニクスの基盤技術とその省エネ製造技術について研究しています。例えば、人体に貼り付け可能な伸縮性をもつウェアラブルデバイスや、透明で環境に溶け込み存在を気づかせないアンビエントデバイスなどの新奇デバイスを、新聞や雑誌を印刷するように高速な印刷法により製造する技術の開発を目指しています。

最近の話題としては、完全に透明で伸縮性に富んだ全カーボン集積回路(図1)の作製に世界で初めて成功しています。これは、透明なプラスチックフィルム上にカーボンナノチューブ薄膜のみを用いてトランジスタや電極・配線などを作り上げることで実現しました。今後は、これに各種センサーなど組み込むことで、人体の皮膚に接着させて、無負担で健康状態を常時監視するスマートセンサーなどを実現してゆきたいと考えています。特に、貼り付け型センサーは、循環器系疾患や糖尿病などの患者の常時監視が必要な場合に極めて有効な手段であり、是非、取り組みたいテーマです。さらに、高性能な薄膜トランジスタをフレキシ印刷という高速な印刷プロセスを用いて作製する技術も開発しています(図2)。本技術により作製したトランジスタは印刷型トランジスタとして世界最高の移動度を示しました。この技術は、スマートセンサーやIDタグ、デジ

タルサイネージなどのデバイスを極限的に省エネルギーかつ低コストで製造する技術の実現に繋がります。

ナノ材料のエレクトロニクス応用においては、構造の制御や配置など、ナノ材料特有の難しさもありますが、そこにこそ研究の醍醐味があり、毎年のようにアッと驚く新技術が開発されます。10年前には夢物語だったカーボンナノチューブの応用技術が、実用化を実感できるようになってきました。ナノ材料によって築かれるエレクトロニクスの新時代はすぐそこに来ています。

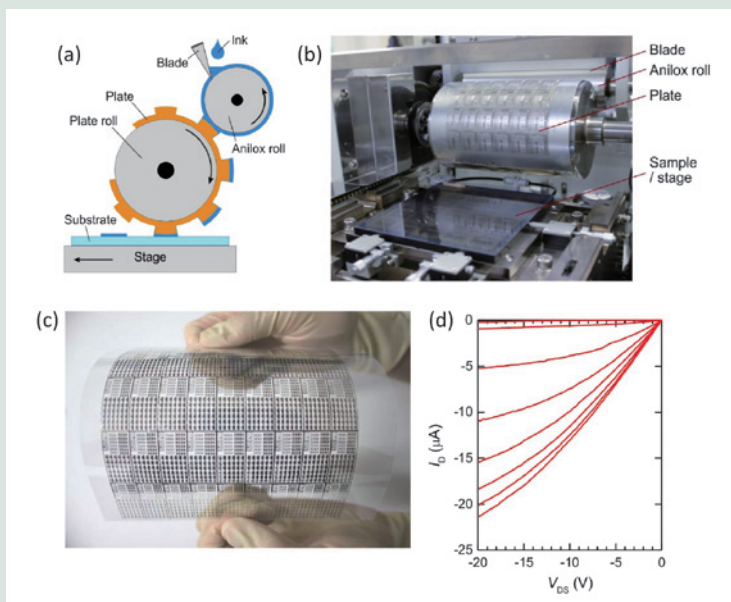
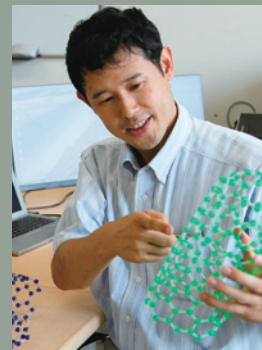


図2 高速印刷技術により作製したカーボンナノチューブ薄膜トランジスタ。(a)フレキシ印刷プロセスの概略図、(b)フレキシ印刷機の写真、(c)プラスチックフィルム上に作製したトランジスタのアレイ、(d)電流—電圧特性。

1999年 日本学術振興会 特別研究員DC2、2000年 名古屋大学大学院工学研究科博士課程修了、2000年 名古屋大学工学研究科助手、2003年 科学技術振興機構さきかけ研究員(併任、2007年まで)、2008年 名古屋大学工学研究科 准教授、2012年 フィンランド・アアルト大学 客員教授(併任、2013年まで)
専門分野: 半導体物性、半導体デバイス、ナノエレクトロニクス、カーボンナノチューブ
モットー: 楽しいときも苦しいときも、何事も楽しむことが大切!

おおの ゆたか



ヤングリーダーズプログラム創立10周年記念式典を挙げる

●大学院医学系研究科



祝辞を述べる総長

大学院医学系研究科は、10月17日(木)、メルパルク名古屋において、ヤングリーダーズプログラム (YLP) 創立10周年記念式典を挙行しました。

式典には、ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー、バングラデシュ、モンゴル国、キルギス、カザフスタン、ウズベキスタン、アフガニスタン、の11ヶ国からYLPの現役生・卒業生47名、関係組織の長、教職員など合計約130名が出席し、10年の節目を祝いました。YLPとは、アジア・東ヨーロッパ諸国等14ヶ国の国家レベルでの活躍が期待される行政官を我が国の大学院に招き、1年程度の短期間で修士の学位を授与する文部科学省の国費プログラムです。本学では、平成15年度に設置し、これまでに118名の卒業生を輩出し、多くの卒業生は各国保健省等の高等高官として活躍しています。

式典では、まず濱口総長から、本学の国際戦略や同窓会の紹介、YLPの現役生・卒業生に対する自国での活躍を激励する式辞があった後、板東久美子文部科学省文部科学審議官、水嶋光一外務省外務副報道官、新原浩朗厚生労働

省大臣官房審議官、高橋医学系研究科長から祝辞が述べられました。

続いて、吉村 融政策研究院参与が講演を行った後、YLP第1期生のアルタンツェヤ・ジグジドスレーン モンゴル・アジア開発銀行社会開発担当官及びブンフェーン・プームマライシット ラオス保健省大臣官房副長官が「海外から見たYLPへの期待」と題した講演を行い、サプライズでモンゴル保健省大臣からビデオレターによる祝辞がありました。

最後に、YLPの初代教授の伊藤勝基本学参与からあいさつがあり、盛況のうちに幕を閉じました。

今後、YLPのネットワークが更に発展し、益々の成果を上げることが期待されます。



ブンフェーン氏の講演の様子

建築学科創設50周年記念事業を開催

●工学部

工学部は、11月9日(土)、豊田講堂、豊田講堂アトリウム、シンポジオンホールにおいて、建築学科創設50周年記念事業を開催しました。建築学科は、昭和38年に創設され、今年で50周年を迎えたことを記念して、建築学教室と同窓生が協力して建築学教室の歩みをふりかえると共に、将来への展望を考える機会として開催されたものです。平成8



記念式典の様子

年には、大学院重点化計画の実施に併せて学科内に建築学コース・社会資本工学コースを併設する社会環境工学科に移行し、平成13年には、大学院建築学専攻が大学院工学研究科から文理融合の理念により新設された大学院環境学研究科に移行しました。また、昨年からは学科名を「環境土木・建築学科」とし、建築が再び表に出る名称に変更となり現在に至っています。この間、昭和42年に39名の第1回卒業生を送り出してから今日までに、建築学科及び建築学コースは約2,000名の人材を社会に送り出しており、同窓生には、受勲、日本建築学会賞等の受賞者も多く、建築界において着実に地歩を築いてきています。

今回、共通テーマを「まちづくりとひとづくりー名大建築50年」として行った記念シンポジウムと講演会には、300名を越える参加者がありました。その後、記念式典を挟んで、建築学教室の関係者200名以上の参加者による記念祝賀交流会を行い、盛況のうちに終了しました。

なお、会場では同窓生が各自、各グループの仕事をパネル展示する「わたしのしごと」展を同時に行うと共に、参加者にはこの企画に合わせて刊行した記念誌が配付されました。

第2回農場講演会を開催

●大学院生命農学研究科

大学院生命農学研究科附属フィールド科学教育センター東郷フィールドは、10月26日(土)、東郷フィールド農業館において、第2回農場講演会を開催しました。東郷フィールドでは、地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」の一環として、平成14年度から毎年、一般市民に大学の研究を身近なものとして伝える「農場講演会」を



講演会の様子

企画・実施しており、今回は、50名近くの参加者がありました。

まず、新美輝幸生命農学研究科助教が「昆虫の模様と形の多様性」と題し、地球上に最も多くの種が存在する昆虫について、それらの模様と形の多様性について紹介しました。昆虫は、約4億年前に地球上に出現し、地球上の様々な環境に適応するために多様な形質を発達させてきました。講演では、まず初めに、地球上の劣悪環境下で生息するために驚異的な能力を身に付けた昆虫が紹介されました。引き続いて、昆虫の多様な形質のうち、“テントウムシの羽の模様”と“カブトムシの角”を例として、種類によって多様なテントウムシの模様やカブトムシのツノがどのように作られるのか、生存にどのように役に立っているのかなどについて、わかりやすく解説されました。

最後に、身近で観察できる昆虫について紹介があり、生き物の多様性の不思議と重要性について考える機会となりました。講演後には熱心な質疑が交わされました。

また今回は、本学附属中学校・高等学校のスーパーサイエンスハイスクール事業の一環として、生徒21名が参加し、講演会終了後には、東郷フィールドの見学会も開催しました。

国際セミナー「現代カンボジアの社会経済発展への挑戦」を開催

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、9月28日(土)、カンボジア王立法経大学(RULE)において、同大学及び王立プノンペン大学(RUPP)の協力を得て、国際セミナー「現代カンボジアの社会経済発展への挑戦」を開催しました。同セミナーは、文部科学省「平成24年度大学の世界展開力強化事業」に採択された「ASEAN地域発展のための次世代国際



セミナーの様子

協力リーダー育成プログラム」の一環として開催され、本事業で海外実地研修のためカンボジアに派遣された同研究科の博士課程前期課程の学生32名に加え、RUPP・RULEの教員、学生、研究者、政府関係者、開発実務者など約80名が参加しました。

セミナーでは、チャンナー・ルイ RULE 学長によるあいさつのもと、ピット・チャムナン カンボジア教育省次官及び井崎 宏国際協力機構(JICA)カンボジア事務所長による基調講演、岡田亜弥同研究科教授によるセミナーの趣旨説明がありました。続いて、梅村哲夫同研究科教授、ハプ・パルティ RULE 大学院プログラム副代表など3大学の教員6名が同国の農村開発や経済改革などに関する研究発表を行いました。パネルディスカッションでは、同研究科修了生のギン・チャンリット RUPP 開発学プログラム長ら4名のパネリストによる討論が行われ、フロアからも学生らから活発な質問や意見がありました。カンボジアの国立大学5大学のうち2大学の学長を輩出するなど、本学のカンボジア高等教育への貢献は研究と人材育成の両面で高く評価されており、同セミナーは、RUPP、RULEとの交流の一層の推進に資する有意義な機会となりました。

キャリア・ガイダンス「国際機関で働くには」を開催

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、11月15日(金)、国際開発研究科オーデトリウムにおいて、キャリア・ガイダンス「国際機関で働くには」を開催しました。

まず、講師である佐藤雅俊外務省国際機関人事センター長から、国連、ユニセフ、ユネスコ、UNHCR、IAEAといった国際機関の職員になるために必要な経験、求められる人



佐藤センター長による講義

材、応募要件、応募方法、日本人の就職状況などについて話がありました。

大学院生を中心に、国際機関への就職に関心がある参加者が集まり、空席公告の見方や職務経験・語学力の重要性、ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー派遣制度(JPO: 将来的に国際機関で正規職員として勤務することを志望する若手が、日本政府が派遣に係る経費を負担することにより、一定期間国際機関で職員として勤務する制度)、ヤング・プロフェッショナル・プログラム(YPP: 国連事務局若手職員を採用する制度で、合格者は2年間の勤務の後、勤務中の成績が優秀であれば引き続き採用される)、国連ボランティア、国際機関におけるインターンシップなどの、大学院修了者や在籍中の学生が国際機関への就職に向けて利用できる制度についての説明に耳を傾けました。

質疑応答の時間には、国際機関が応募者に求める資質や経験、試験のために準備をすすめる方法などについて、活発に質問がなされました。

国際シンポジウム「世界と対話する－世界が日本を見る眼・日本が世界を見る眼」を開催

●大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科は、11月8日(金)、文系総合館7階カンファレンスホールにおいて、国際シンポジウム「世界と対話する－世界が日本を見る眼・日本が世界を見る眼」を開催しました。このシンポジウムは、内閣官房、株式会社中日新聞社、トヨタ自動車株式会社、名古屋アメリカンセンターの協力を得て、同研究科メディアプロフェッ



シンポジウムの様子

ショナル論講座開設10周年を記念して開催されました。

まず、小西工己トヨタ自動車株式会社常務により、価値観を明確にした企業理念に基づく国際広報が、米国におけるリコール問題等からの信頼回復をもたらしたとする基調講演を受け、小野日子内閣副広報官は、英語等での各省庁の連携による情報発信態勢を整え、福島原発事故で傷ついている日本ブランドの再構築に全力を挙げているとの現状を説明しました。米国のサリバン在名古屋首席領事は、日本は近隣諸国の理解を得ていけば、日米同盟を礎として地域安定へ大きな役割を果たせると話しました。また、山田哲夫東京新聞論説主幹は、福島原発事故の報道がマスコミ不信を招いたと指摘し、独自の報道による信頼回復の必要性を強調、中村登志哉同研究科教授は、福島原発の汚染水問題が日本の広報外交の阻害要因の一つになっていると指摘し、国際原子力機関といった第三者の関与など国際社会での信頼の担保が不可欠と述べました。同日開催された10周年記念レセプションでは、小出宣昭中日新聞社長が、研究教育で時代の最先端を走り、不断の革新を続けることが同講座の更なる発展につながると今後への期待を示しました。

教育研究プロジェクト、合同研究会を開催

●大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科は、11月9日(土)、文系総合館7階カンファレンスホールにおいて、平成25年度国際言語文化研究科教育研究プロジェクトのうち、「日韓合同日本文化研究」(胡プロジェクト)、「文化創造の展開および発展」(伊藤プロジェクト)の合同研究会を開催しました。

「日韓合同日本文化研究」は、11月23日(土)にソウルの



カンファレンスホールでの発表風景

世宗大学集賢館7階で、韓国の世宗大学、中央大学の教員と同研究科教員及び大学院生が参加して「日本文化研究とは何か」をテーマに行われる研究集会ですが、その参加前に、大学院生の研究を多くの人に報告し、その研究の進展を問うために行われました。

また、「文化創造の展開および発展」プロジェクトは、既に4年目を迎え、毎年、中部地区以外で研究会を催しているグループを招待し、互いの研究の進展を図るために行われています。

今回は東京から「異類の会」代表者である伊藤慎吾中央学院大学講師と研究会メンバーである青山学院大学院生の杉山和也氏を迎え研究報告がなされました。

この研究会は、若手研究者の育成が目的で、発表者は本学の大学院生が中心でしたが、一般の方の来場者も多く、また、異分野の教員の参加者も多数あり、活発な討論が行われました。

なお、「文化創造の展開および発展」プロジェクトは、来年3月22日(土)に、西尾市岩瀬文庫において、「絵ものがたりの世界－異類・異界・異形」をテーマとして、再度開催される予定です。

三重県松阪市と連携協定調印式等を挙

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科は、11月12日(火)、環境総合館レクチャーホールにおいて、三重県松阪市との連携協定調印式を挙りました。この調印式には、山中光茂松阪市長、小林益久副市長をが列席しました。

この連携協定は、両者が共同研究を推進するとともに、教育面においても連携し、研究科から市政への助言を行う



調印後の記念撮影

ことなどにより、密接な連携・協力を図り相互発展に資することを目的としたものです。きっかけは、同研究科及び大学院生命農学研究科が進めるグローバルCOEプログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」の中で、博士課程後期課程学生の実践的フィールド教育の場の1つとして松阪市を中心とした榑田川流域圏を選定したことです。学生や教員が調査研究活動を進める中で、松阪市役所や住民の方々に様々な協力をいただき、一般公開の研究成果報告会で意見交換するなどの機会を通して、プログラム終了後もより幅広い連携を進めて行くこととなり、協定締結に至りました。研究科と自治体との連携協定は今回が初めてです。

調印式終了後、山中市長による「市民が役割と責任を担うまちづくり」と題した講演が行われ、市が実践する市民参画型の合意形成や施策実施について紹介されました。引き続き、清水裕之同研究科教授がコーディネータを務め、山中市長、小林副市長及び久野同研究科長ほか同研究科教員がパネリストとなって「自治体と大学の連携によって何ができるか？」をテーマとする意見交換会が行われ、今後の具体的な連携の方向性について深く議論を行いました。

ノーベル賞緊急講演会「ヒッグス粒子の正体に迫る」を開催

●素粒子宇宙起源研究機構

素粒子宇宙起源研究機構(KMI)は、10月17日(木)、理学南館大講堂において、ノーベル賞緊急講演会「ヒッグス粒子の正体に迫る」を開催しました。これは、10月8日(火)に発表されたノーベル物理学賞の受賞内容とそれに関わる本学における研究を紹介する一般の方向けのものです。平日夕方の開催にも関わらず約300名もの参加があり、この

研究への関心の高さがうかがえました。

講演は3部構成で、今年のノーベル物理学賞の受賞対象となったヒッグス機構とヒッグス粒子の概説、ヒッグス粒子の発見、そしてヒッグス研究のこれからの展開について話されました。まず、倉知昌史基礎理論研究センター特任助教が「ヒッグス機構とヒッグス粒子」と題して、ヒッグス機構とその周辺の理論的な考え方に関して解説しました。続いて、戸本 誠現象解析研究センター准教授が「ヒッグス粒子の発見とさらなる新粒子を求めて」と題し、ヒッグス粒子を発見したLHC-ATLAS実験の成果と今後の実験計画に関して紹介しました。最後に、青木保道基礎理論研究センター准教授が「ヒッグス発見の向こうに一大規模数値計算で探る新法則」と題して、KMIで研究している大型計算機を使った、発見されたヒッグス粒子の正体を理解していく研究の成果を紹介しました。

講演会は、難しいと思われる内容にも関わらず熱心に講演を聞き入る参加者の姿が印象的で、各講演には多くの質問が寄せられました。この偉大な研究成果にはKMIも大きく貢献していることを理解してもらおう良い機会となりました。



論文を紹介する倉知特任助教

ICCAE 第14回オープンフォーラムを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、10月29日（火）、30日（水）の両日、野依記念学術交流館において、第14回オープンフォーラム「世界で活躍できるグローバル農学人材の育成に向けた大学の取組みの方向性—多様なキャリアパスの開拓に向けた現状と課題—」を開催しました。

日本中でグローバル人材育成の必要性が叫ばれています



集合写真

が、大学はどうやってその要請に応え、若い人材を育てていくのか、その現状と課題について議論しました。国内外で教育を受け、現在、国際研究機関（CIAT、ICRISAT）、国際行政機関（OIE）または国際協力関係の第一線で働いている日本人の方々から自らキャリアを築いてきた努力の跡の発表や、学部学生及び大学院生の教育に先進的な取り組みを行っている鳥取大学、茨城大学、本学から海外実地研修やインドネシアの大学とのダブルディグリー等の事例の発表がありました。

農学は、途上国の農業の現場に自ら出向き、農民と話す中で問題を把握し、その解決に何をどのように研究するか技術を適用するかを現場で考える教育、すなわちフィールド研究の中での人材育成が重要であること、現場全体を見通すことができるアグロノミストが求められていることも指摘されました。同時に、ストレートに大学に行かないでまず現場の問題に関わり、必要性を感じた上で大学に戻って勉強することもあるので、大学側はそれに対して対応していくことが求められていることが分かりました。学部学生に対するチャンスの提供と大学院生に対する持続する支援が重要であることが共有されました。

第94回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、10月23日（水）、環境総合館レクチャーホールにおいて、第94回防災アカデミーを開催しました。今回は、越智繁雄国土交通省水管理・国土保全局・水資源部長による「幅を持った社会システムの構築を～ハードと、ソフトと、そしてシステムと～」と題した講演が行われ、96名の参加がありました。



講演中の越智氏

越智氏からは、新燃岳噴火災害と東日本大震災時に内閣府防災担当として活動した経験から具体的事例を交え、特に物資調達と燃料不足、情報途絶の問題にどのように挑めばよいかを課題であること、危機管理においてもっとも重要な点は経験・土地勘・平常時の三原則であることなどが紹介されました。その後、南海トラフ巨大地震が迫る我が国においては「安全・安心を踏まえた国土のグランドデザインをどのように設計するか」という視点が何より求められ、超効率的な社会構造を見直すとともに、災害に負けない国づくりや地域づくりを支えるインフラをハード対策、ソフト対策、システム構築から再考することが今後必要であるなど詳しい説明がありました。

会場からは講演内容を踏まえ、活発な質疑応答が行われました。

第30回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催

●附属図書館

附属図書館は、11月12日(火)、情報基盤センター4階演習室において、第30回友の会トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催しました。今回は、高野 彰元跡見学園女子大学教授が『『余輩とは吾輩のことかと猫が言い』：漱石の本の話』と題して講演し、学内外から35名の参加がありました。



講演する高野氏

講演では、まず、夏目漱石が初校で手を入れなかったエピソードを「坊っちゃん」の原稿と実際に発表された作品を例にして解説しました。また、「吾輩は猫である」の初出文中にある「妻君」「細君」等の同義異字の使い分けに込められた意味や、漱石の表現力の高さが「泥溝（どぶ）」など随所に表れていることなどについて説明がありました。

また、文庫本は気軽に読めることを主眼にしていることから、出版社や編集者によって旧字体から新字体への変更や読み仮名を振るなど読みやすくするための変更が加えられていることがあり、例として、「吾輩は猫である」の初出文中における「吾輩」「我輩」「余輩」「余」の表記は、文庫本ではすべて「吾輩」に統一されていることが紹介されました。

参加者からは、「表現方法の多様性を知ることができた」、「今まで読み辛いと敬遠してきたが、漢字を一つひとつ追いながらじっくり読みたいと思った」などの感想が寄せられました。

第27回企画展「本物? 作り物? ロウ細工? 教育標本ムラージュ」を開催

●博物館

博物館は、8月6日(火)から10月19日(土)までの間、第27回博物館企画展「本物? 作り物? ロウ細工? 教育標本ムラージュ」を開催しました。

今回の会場は、通常行われている同館3階の展示場以外にも野外観察園セミナーハウス2階をサテライトとして使用しました。メインの展示品である皮膚科学のムラージュ

(皮膚症例の蠟細工)は、昭和45年ごろまで本学の医学教育に実際使用されていたもので、現在、同館所蔵の536点の中から60点を展示しました。本物と見間違えるほど精巧にできた皮膚症例は、当時の患者さんの同意を得て患部から直接型を取り、ロウ細工で作った物です。さらに今回は、ムラージュを制作した名工 長谷川兼太郎氏のムラージュ制作方法からその人柄までも詳しく知ることができる内容で、同館ならではの展示となりました。

会期中には、秋山真志医学系研究科皮膚病態学分野教授をはじめとする講演会を4回、コンサートを1回開き、展示期間の入館者は延べ8,235名と多くの方が来館しました。



展示の様子

第3回地球教室を開催

●博物館

博物館は、10月26日(土)、27日(日)の2日間、名古屋市科学館との共催で、親子対象フィールドセミナー「第3回地球教室」を開催しました。

今回のテーマは「ナゴヤで化石をさがそう！」で、多数の応募者の中から抽選で選ばれた小・中学校の生徒とその保護者を含む25名が参加しました。



建材の石灰岩に含まれる化石を観察する参加者

1日目は、同館で化石が含まれる岩石の見分け方や化石のでき方に関する講義を行った後、建材としてカットされた岩石の表面に化石がどのように表れるかを知るために、現生の貝を切断して、その断面の観察を行いました。

この予習を踏まえ、2日目は名古屋駅と栄地区周辺に出かけ、壁や柱に用いられている石材の断面からアンモナイトやウミユリなどの化石を発見し、観察しました。参加者は、通勤や通学など普段の生活で見慣れた場所にも、意外な自然が隠されていたことに驚きながら化石を観察していました。

なお、この事業は、愛知大学名古屋一般教育研究室の方の援助を受けて行われました。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
1 下村 脩本学特別教授が研究に必要なウミホタルの採取のため何度も訪れた広島県高根島を約50年ぶりに訪れた	10.16 (水) 10.17 (木) 10.18 (金)	神戸新聞 熊本日日新聞 京都新聞 (夕刊)
2 現代日本訳百科 (878):「主張性」が見え隠れする 町田 健文学研究科教授	10.16 (水)	中日 (朝刊)
3 ノーベル賞緊急講演会「ヒッグス粒子の正体に迫る」開催:17日 戸本 誠理学研究科准教授と青木保道基礎理論研究センター准教授、倉知昌史同特任助教が講演	10.16 (水)	日刊工業
4 生命農学研究科「あいち自然再生カレッジ」開催:11月9、16、30日、12月7、14日	10.16 (水)	読売
5 講演会「愛知県パーキンソン病フォーラム」開催:11月17日 祖父江 元医学系研究科教授が総司会を務め、渡邊宏久同特任教授と平山正昭同准教授が講演	10.16 (水) 10.29 (火)	読売 中日 (朝刊)
6 環境医学研究所 市民公開講座2013「環境・遺伝子の変異・疾患」開催:19日 益谷央豪環境医学研究所教授が講演	10.16 (水)	読売
7 叙位叙勲:従四位瑞宝小綬章 林 博司本学名誉教授	10.16 (水)	読売
8 現代日本訳百科 (879):当店は「さらに新しく生まれ変わります」町田 健文学研究科教授	10.17 (木)	中日 (朝刊)
9 学びの今:「キャリア・マイスター」制度 柴田好章教育発達科学研究科准教授は「子どもの学びを支える専門家である教師の知恵と、キャリア・マイスターならではの社会経験がうまく融合することが重要」と語る	10.17 (木)	読売
10 留学生に対する日本語パートナー講座:衣川隆生国際教育交流本部教授が講義	10.17 (木)	中日 (朝刊)
11 読売新聞講座「Space Race in Asia (アジアの宇宙開発競走)」開催:16日 読売新聞東京本社科学部次長が本学の修士課程1、2年生と短期留学生ら約40人に英語で講義	10.17 (木)	読売
12 シンポジウム「平和への権利と日本国憲法の平和主義」開催:15日 本 秀紀法学研究科教授と愛敬浩二同教授が意見を述べた	10.17 (木)	中日 (朝刊)
13 秋の園遊会:31日 招待者 濱口総長、杉山達夫本学名誉教授	10.17 (木) 10.18 (金)	読売 朝日 (朝刊)
14 朝日カルチャーセンター講座「月と地球、太陽系、そして宇宙へ～電波天文学の最前線から」:福井康雄理学研究科教授	10.18 (金) 11. 2 (土) 11. 9 (土)	朝日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
15 坪木和久地球水循環研究センター教授は台風26号の被害が大きかった東京都大島町元町地区周辺について「三原山からの距離の違いなど、地形が影響したのではないかと語る	10.19 (土)	読売
16 つかめ!! 学生の心 富士機械製造株式会社が開いた理科コンテストでナノロボットを埋め込み健康を管理するアイデアを発表し同社の社員から質問を受けた今井 駿さん工学部4年生は「実現できるかを問う企業の姿勢は、研究生生活を送る学生としては新鮮だった」と語る	10.19 (土)	中日 (朝刊)
17 教えて!東京五輪③建て替える国立競技場 どう変わる? 榎 文彦本学名誉博士は「緑豊かで濃密な歴史を持つ風致地区に、巨大な施設を造るのは間違っている」と語る	10.19 (土)	朝日 (朝刊)
18 現代日本訳百科 (880):「喫茶店で雑誌を読みに行く」町田 健文学研究科教授	10.21 (月)	中日 (朝刊)
19 広がる 理・工学の世界～中部のリーディング大学 理・工学リーダーが語る ものづくりの神髄～ 名古屋大学	10.21 (月)	朝日 (朝刊)
20 未来を拓く大学39:名古屋音楽大学長高橋 肇氏本学卒業生	10.21 (月)	読売
21 現代日本訳百科 (881):長い年月「キャスターとして携わった」町田 健文学研究科教授	10.22 (火)	中日 (朝刊)
22 ヤング・リダーズ・プログラム創設10周年記念式典開催:17日	10.22 (火)	中日 (朝刊)
23 「ひざに痛みを感じたら、整形外科を受診しましょう。」石黒直樹医学部附属病院長の話	10.22 (火)	中日 (朝刊)
24 第45回中日教育賞贈呈式開催:22日 松田武雄教育発達科学研究科教授が受賞者を祝う	10.22 (火)	中日 (夕刊)
25 現代日本訳百科 (882):「皆さんに与えられる」ことが多かった 町田 健文学研究科教授	10.23 (水)	中日 (朝刊)
26 数理ウェブ開催:26日 大沢健夫多元数理科学研究科教授が「ゼータ関数とL関数」と題して講演	10.23 (水)	中日 (朝刊)
27 8月18日に開催された第24回英国科学実験講座クリスマス・レクチャー2013が27日にBS日テレで放送	10.23 (水)	読売
28 本学は前駐中国大使丹羽宇一郎氏本学卒業生に名誉博士の称号を授与し、濱口総長は「私たちが育成目標とする『勇気ある知識人』の典型モデル。これまでの功績をたたえたい」と語る (読売)	10.24 (木)	読売
29 本学と東京大学、国立遺伝子学研究所などによる共同研究チームがスペイン南部の「ハボン (日本)」姓の人たちが住む町で血液採取を行い、日本人のサムライらとの血液関係をDNA鑑定で探る	10.25 (金)	読売
30 日独国際シンポジウム「日独自治体エネルギーシフト戦略ー地域からの挑戦」開催:24日 杉山範子環境学研究科特任准教授は「自治体が電力や熱の供給事業者となることも含め、エネルギーシフトを実現する方策を模索していきたい」と語る	10.25 (金)	中日 (朝刊)
31 和田 肇法学研究科教授は生活保護法改正案に反対する学者など研究者による共同声明の呼びかけ人として取り上げられる	10.25 (金)	中日 (朝刊)
32 高校生による科学の祭典2013開催:27日 益川敏英本学特別教授が来場予定	10.25 (金)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
33 2013年度文化功労者：榎 文彦本学名誉博士	10.25 (金) 10.26 (土)	中日 (夕刊) 読売 他3社
34 ビハーク医療団：9月7、8日に行われた「ビハーク」を実践する医療関係者の研修大会について 田代俊孝医学系研究科非常勤講師	10.26 (土)	中日 (朝刊)
35 栄中日文化センターだより 1 DAY セミナー「隠れ脳梗塞 (こうそく) の早期発見と予防」：11月17日 石田和人医学系研究科講師	10.27 (日)	中日 (朝刊)
36 通風筒：26日に「八高創立百五年記念祭」が開かれた	10.27 (日)	中日 (朝刊)
37 大学トップの語るミッション 名古屋大学 世界水準の教育・研究でグローバルに活躍する人材を育成 濱口総長	10.27 (日)	朝日 (朝刊)
38 知ってください関節リウマチ～最新の治療～ 石黒直樹医学部附属病院院長	10.27 (日)	朝日 (朝刊)
39 ニュースの本棚：丹下健三生誕100年 榎 文彦本学名誉博士が丹下健三研究室で学んでいたことが取り上げられる	10.27 (日)	朝日 (朝刊)
40 現代日本誤百科 (884)：「絶妙なやわらかさ」に変身 町田 健文学研究科教授	10.28 (月)	中日 (朝刊)
41 特定秘密保護法案に反対する市民集会が開かれ本 秀紀法学研究科教授がパネルディスカッションを行った	10.28 (月)	中日 (朝刊)
42 子育てセミナー「『超苦手なことを持つ子』の育て方」開催：27日 本学にて行われた	10.28 (月)	中日 (朝刊)
43 第5回秋田民謡全国大会：三味線部門 優勝 正木啓太さん本学2年生	10.28 (月)	中日 (夕刊)
44 小澤正邦エコトピア科学研究所教授などのグループはセリウムの使用量を30%低減した新しい自動車排ガス浄化用触媒材を開発	10.29 (火)	日刊工業 他4社
45 高等教育の環境拡充へ 野依良治本学特別教授は「グローバル化が進み地球が狭くなったことと、IT技術の発達という状況を踏まえ、科学教育を進めていく必要がある」と語る	10.29 (火)	日刊工業
46 紙上診察室：多系統萎縮症どんな病気？ 渡邊宏久医学系研究科特任教授	10.29 (火)	中日 (朝刊)
47 国際言語文化研究科国際シンポジウム「アジアにおけるノーベル文学賞」一日中韓の研究者による対話－開催：11月3日	10.29 (火)	中日 (朝刊)
48 名駅西 TSUBAKI フェスタ2013開催：11月2、3日 本学留学生が特設ステージのライブでアニメソングを歌う	10.29 (火)	中日 (朝刊)
49 全国小・中学校作文コンクール：中学校の部 愛知県最優秀賞 加藤敦也さん教育学部附属中学校3年生	10.29 (火)	読売
50 2014年「ESD ユネスコ世界会議」開催連動企画～開催1年前編～紙上対談 濱口総長×中部大学理事長飯吉厚夫氏	10.29 (火)	朝日 (朝刊)
51 現代日本誤百科 (885)：運航を「再開することを決定」町田 健文学研究科教授	10.30 (水)	中日 (朝刊)
52 国際言語文化研究科メディアプロフェッショナルコース開設10周年記念国際シンポジウム「世界と対話する－世界が日本を見る眼・日本が世界を見る眼－」開催：11月8日	10.30 (水) 11. 9 (土)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
53 本学は文部科学省「革新的イノベーション創出プログラム (COI STREAM)」の拠点公募に対し「多様化・個別化社会イノベーションデザイン拠点～いつまでも生き活きと活動し暮らせる社会とモビリティ」を提案し採択された	10.31 (木)	日刊工業
54 附属図書館医学部分館第5回ミニ展示会「愛知医学校長 後藤新平 - 『大風呂敷』と呼ばれた男の名古屋時代-」開催：9月25日～2014年1月31日	10.31 (木)	朝日 (朝刊)
55 「がん患者生活サポート LOMO の会」公開学習会開催：山木照子さん医学系研究科博士課程が講演	10.31 (木)	中日 (朝刊)
56 市民公開講座「生活習慣の見直しと定期検査で腎臓病を予防・改善しましょう」開催：9月29日 松尾清一医学系研究科教授、丸山彰一同准教授、安田宜成同寄附講座准教授、鈴木富夫医学部附属病院栄養管理部副部長が講演	10.31 (木)	朝日 (朝刊)
57 米国生理学会は下村 脩本学特別教授とともにノーベル化学賞を受賞したロジャー・チエン博士らが受賞したボウディッチ賞を京都大学講師中村和弘氏に授与すると発表	11. 1 (金)	日刊工業
58 川崎浩司工学研究科准教授は津波に強い設計のマンションについて「近隣住民も避難できるマンションが増えれば、地域の防災力アップにつながる」と語る	11. 1 (金)	中日 (朝刊)
59 本学と愛知教育大学、三重大学は私立の名古屋外国語大学から専門の英語教員を招き、世界で活躍する人材の育成に向けた講座を開催	11. 1 (金)	中日 (朝刊)
60 平成25年度 愛知のものづくりを支える留学生制度の対象者が選出され本学からも選ばれた	11. 1 (金)	朝日 (朝刊)
61 秩父宮賜盃 第45回全日本大学駅伝対校選手権大会：東海学連選抜 池亀 透さん本学4年生、矢野祥一さん同4年生、森本義智さん同3年生	11. 1 (金)	朝日 (朝刊)
62 あいちを背負う？ 東三河県庁はいま■番外編■ 愛知県副知事永田 清氏本学卒業生のインタビュー	11. 1 (金)	中日 (朝刊)
63 地球電磁気・地球惑星圏学会会見：村木 綏本学名誉教授が「屋久杉の年輪幅と太陽活動の周期との関連」について説明	11. 2 (土)	高知新聞
64 病院の実力：てんかん 医学部附属病院の実績が取り上げられる	11. 3 (日)	読売
65 叙勲：瑞宝重光章 岸 義人本学特別教授、瑞宝中経章 潮木守一本学名誉教授、勝又義直同名教授、三谷法雄同名教授、森 正夫同名教授、森島昭夫同名教授	11. 3 (日)	中日 (朝刊)
66 備える3.11から第80回迫る土砂災害：山岡耕春環境学研究科教授は「粘りけのある溶岩流なら人間の歩きよりもゆっくり進むから、多くの人が避難できた。でも、土石流は猛烈な速さだった」と語る	11. 4 (月)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
67 現代日本誤百科 (887):「提案を持ちかけてきた」町田 健文学研究科教授	11. 4 (月)	中日 (朝刊)
68 現代日本誤百科 (888):「ホームベーカリーがリニューアルした」町田 健文学研究科教授	11. 5 (火)	中日 (朝刊)
69 読書フェスティバル開催:4日 益川敏英本学特別教授が講演し「新しい知識を得ることは楽しい。それぞれの個性に合った知識の塊を友人と紹介し合うことを続けてほしい」と語る	11. 5 (火)	読売
70 平成25年度「全国糖尿病週間」名古屋大学病院糖尿病公開講座「世界糖尿病デー とともに歩もう、ゆたかな人生」開催:9日 医学部附属病院で行われる	11. 5 (火)	中日 (朝刊)
71 第28回博物館企画展『『氷壁』を越えてーナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯ー』開催:5日～2014年1月30日	11. 5 (火) 11. 6 (水)	毎日 (朝刊) 中日 (朝刊) 朝日 (夕刊)
72 現代日本誤百科 (889):別のグループとは「一線を引く」町田 健文学研究科教授	11. 6 (水)	中日 (朝刊)
73 現代日本誤百科 (890):「難航極める」作業 町田 健文学研究科教授	11. 7 (木)	中日 (朝刊)
74 本学は益川敏英本学特別教授がベトナムの国立総合大学ベトナム国家大学ハノイ校から名誉博士号を授与されると発表	11. 8 (金)	中日 (朝刊)
75 第19回名古屋メダルセミナー授与式:7日 野依良治本学特別教授が同メダル受賞者にメダルを手渡す	11. 8 (金)	中日 (朝刊)
76 日中平和友好条約締結35周年記念丹羽宇一郎 前駐中国大使 特別講演「日中関係の真実と日本経済の行方」開催:7日 丹羽宇一郎本学名誉博士が講演	11. 8 (金) 11.10 (日)	読売 中日 (朝刊)
77 小林 誠本学特別教授が理事長を務める仁科記念財団は2013年度仁科記念賞の受賞者を発表	11. 8 (金)	中日 (朝刊) 読売
78 ちゅうぶ人駆ける:「教科書に載る研究が目標」吉村 崇トランスフォーマティブ生命分子研究所教授	11. 9 (土)	日経 (夕刊)
79 第18回 テラ・カフェ「インド講座」:17日 デーウィッシュさん本学大学院生が講演	11. 9 (土)	中日 (朝刊)
80 みちまちづくりにポジウム～「みち」をかえて「まち」をかえよう!～開催:10月20日 森川高行環境学研究科教授がトークセッションに参加	11. 9 (土)	中日 (朝刊)
81 編集員が迫る:本学も参加する「ロボットは東大に入れるか」プロジェクトの人工知能「東ロボくん」について	11. 9 (土)	読売
82 持続可能な開発へ考え、動く ESD ユネスコ世界会議まで1年 濱口総長が共同代表を務める中部 ESD 拠点代表中部大学総長飯吉厚夫氏のインタビュー	11.10 (日)	中日 (朝刊)
83 福井教室100回記念特別イベント「福井教室&プラネタリウム観覧」開催:9日 福井康雄理学研究科教授が解説	11.10 (日)	中日 (朝刊)
84 いまドキッ!大学生:英語で学ぶスタイルへ④ 渡辺理事が『『名大出ても英語が使えないのか』と言われないよう、英語による講義を増やしたい』と語る	11.12 (火)	中日 (朝刊)
85 レーザー:社会貢献で評価を 野依良治本学特別教授は「研究の評価は特許や論文など過去の活動に対するものよりも、5-10年後に社会が求めるものをだせるかどうかが重要だ」と語る	11.12 (火)	日刊工業
86 現代日本誤百科 (891):「風を巻き起こす」町田 健文学研究科教授	11.12 (火)	中日 (朝刊)
87 豊田工業高等専門学校創立50周年記念式典:トヨタ自動車株式会社社会長内山田竹志氏本学卒業生が講演	11.12 (火)	毎日 (朝刊)
88 現代日本誤百科 (892):「技の思い切りがいい」町田 健文学研究科教授	11.13 (水)	中日 (朝刊)
89 本学が炭素繊維強化プラスチックの研究について先行しているとしてナショナルコンポジットセンターが取り上げられる	11.13 (水)	日経 (朝刊) 中日 (朝刊)
90 国際言語文化研究科メディアプロフェッショナルコース開設10周年記念公開講義「日本に関わる歴史と領土をめぐる論争ードイツ・オーストリアとの比較分析」開催:22日	11.13 (水)	毎日 (朝刊)
91 学びの今:世界で活躍できる人材育成 PhD プロフェッショナル登龍門について濱口総長が「国際舞台で活躍する人材を育てたい」と語る	11.14 (木)	読売
92 益川敏英本学特別教授がベトナム国家大学ハノイ校から名誉博士号を授与された	11.14 (木)	中日 (朝刊) 日刊工業
93 現代日本誤百科 (893):「土砂崩れのふもと」町田 健文学研究科教授	11.14 (木)	中日 (朝刊)
94 日本学術会議中部地区会議学術講演会「大学からの知の発信ー文理融合の視点からー」開催:20日 安藤隆穂経済学研究科教授、藤吉好則創薬科学研究科特任教授が講演	11.14 (木)	中日 (朝刊)
95 槇 文彦本学名誉博士が設計したニューヨーク世界貿易センタービルの跡地の高層ビルが完成し式典が開かれた	11.14 (木)	中日 (夕刊)
96 中京長寿医療研究推進財団 第2回市民公開講座「長寿社会を健康で生き生き生きる」開催:12月7日 濱口総長、葛谷雅文医学系研究科教授が講演	11.15 (金)	中日 (朝刊)
97 野依良治本学特別教授に続き日本人で3人目の現会員として京都大学教授山中伸弥氏がローマ法王庁科学アカデミーの会員に任命された	11.15 (金)	日経 (朝刊) 他2社
98 東海学生ラグビーリーグ A1・A2入れ替え 本学が名古屋経済大学に33-24で勝利	11.15 (金)	中日 (朝刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

9月25日(水)～1月31日(金)

場 所：附属図書館医学部分館

2階入口ホール

時 間：9:00～20:00(平日)

(1月6、7日は9:00～17:00)、

13:00～17:00(土曜日)

休 館 日：日・祝日、

12月28日(土)～1月4日(土)

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

附属図書館医学部分館 052-744-2505

附属図書館医学部分館第5回ミニ展示会

「愛知医学校長 後藤新平

ー『大風呂敷』と呼ばれた男の名古屋時代ー

内 容：壮大な発想から「大風呂敷」と呼ばれた政治家後藤新平の足跡を愛知医学校時代を中心にたどる。卒業証書などの新収史料、貴重な文献、写真、絵葉書、生涯を描いたDVDを展示。



10月22日(火)～12月19日(木)、

1月6日(月)～3月19日(水)

場 所：博物館野外観察園

セミナーハウス2階

時 間：10:00～16:00

休 館 日：土・日・祝日

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

博物館野外観察園セミナーハウスサテライト展示

「ボタニカルアートと写真による観察園の植物」

テ ー マ：「I - 秋の植物」(10/22～12/19)

「II - 冬と早春の植物」(1/6～3/19)



11月5日(火)～1月30日(木)

場 所：博物館3階企画展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：日・月曜日、

12月28日(土)～1月6日(月)

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

第28回博物館企画展「『氷壁』を越えて

ーナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯ー

[関連講演会]

1月17日(金)

場 所：博物館3階講義室

時 間：13:30～15:00

講演題目：「ながら山登りの楽しみ方ー雲を読む、風を読む、光を読むー」

講 演 者：三矢保永(本学名誉教授)

対 象：一般

参 加 費：無料



12月16日(月)

場 所：文系総合館7階

カンファレンスホール

時 間：15:00～16:45

定 員：50名

対 象：一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

国際言語文化研究科

メディアプロフェッショナル論講座

事務室

gen-mediajim@lang.nagoya-u.ac.jp

国際言語文化研究科メディアプロフェッショナル論講座

レクチャー&ディスカッション

講演題目：「アメリカのデジタルジャーナリズム最前線

(The Cutting Edge of American Digital Journalism)」

講 演 者：ジェロミー・キャプラン氏

(ニューヨーク市立大学ディレクター)

内 容：参加者の質問にこたえながらアメリカのデジタル&企業ジャーナリズムの最新情報を紹介する(英語の通訳あり)



12月20日(金)、1月25日(土)、

2月1日(土)、8日(土)

対 象：一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

工学研究科

特任准教授 浅野益之 052-747-6753

経済産業省中部経済産業局

平成25年度地域企業立地促進等補助事業：

「航空機開発グローバルプロジェクトリーダー教育の展開」

[サテライト講座] (12/20)

場 所：各務原市産業文化センター2階第3会議室(各務原市那加桜町)

時 間：9:45～16:30

[展開講座]

場 所：ES総合館1階103会議室(1/25)、ESホール(2/1、8)

時 間：9:00～17:00(1/25)、10:00～17:00(2/1、8)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

12月21日(土)

場 所: 野依記念学術交流館
時 間: 13:30~16:30
定 員: 200名
対 象: 一般
参 加 費: 無料

地球水循環研究センター公開講演会

テ ー マ: 「地球環境変動—気候変化からハビタビリティまで—」
講演題目: 「気候変動と森林破壊」
講 演 者: 熊谷朝臣 (地球水循環研究センター准教授)
講演題目: 「氷期・間氷期から探る地球温暖化」
講 演 者: 吉森正和氏 (東京大学特任助教)
講演題目: 「地球環境と生命の進化」
講 演 者: 田近英一氏 (東京大学教授)
講演題目: 「もう一つの地球: 系外惑星とハビタビリティ」
講 演 者: 玄田典典氏 (東京工業大学研究員)
内 容: 数十年から数十億年にわたるさまざまな時間スケールで起こる地球環境変動の成り立ちを紹介する



[問い合わせ先]
研究所事務部総務課 052-789-3466

12月21日(土)

場 所: 博物館 2階展示室
時 間: 14:00~15:00

博物館クリスマスコンサート NUMCo 「知られざる音楽大国 ベネズエラのしらべ —国民的楽器クアトロを中心に—

演奏曲目: 「草原の魂」、「コーヒーールンバ」、他
出 演: 「CELESTE (セレステ)」 出口泰司氏 (クアトロ、バンドーラ)、
岡野友絵氏 (ベース、クアトロ)



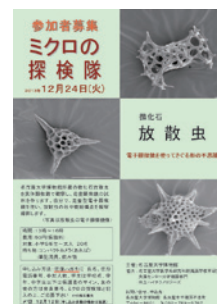
[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

12月24日(火)

場 所: 博物館 2階実験室
時 間: 13:00~16:00
定 員: 20名
対 象: 小学5年生以上、一般
参 加 費: 50円 (保険料)

ミクロの探検隊® 「微化石 放散虫 —電子顕微鏡を使ってさぐる形の不思議—

内 容: 博物館所蔵の微化石放散虫を実体顕微鏡で観察し、走査顕微鏡の試料を作り、放散虫の形や微細構造を観察撮影する



[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

12月24日(火)

場 所: 情報基盤センター 4階演習室
時 間: 13:00~14:30
定 員: 40名
対 象: 一般
参 加 費: 無料

平成25年度第9回 情報連携統括本部公開講演会・研究会

[問い合わせ先]
情報推進部情報推進課 052-789-4368

12月25日(水)

場 所: ES 総合館 1階 ES ホール、
環境総合館 1階レクチャーホール、
講義室
時 間: 10:00~16:00
対 象: 参加校の高校生、本学教員、
愛知県職員、他
参 加 費: 無料

高校生防災セミナー

内 容: 高校生防災フォーラム代表校発表、グループ発表、意見交換、
修了式

[問い合わせ先]
減災連携研究センター 052-789-3468

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

1月9日(木)

場 所：カフェフロンテ

時 間：18:00～19:30

定 員：50名

対 象：一般

参 加 費：無料（会場にてドリンク等の注文が必要）

第32回げんさいカフェー Gen Science Café

講演題目：「日本の木造住宅の耐震性能」

講 演 者：古川忠稔（環境学研究科准教授）

内 容：木造住宅の耐震化関連



[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

1月25日(土)、2月1日(土)

場 所：インキュベーション施設1階
プレゼンテーションルーム

時 間：10:00～15:00

ビジネス人材育成センター 平成25年度後期B人セミナー

テ ー マ：「弁理士業務の実際と将来求められる人物像（仮題）」、

「博士・ポスドクのための就職ガイダンス」（1/25）

「プレゼンテーションスキル研修

－研究発表を、誰にでもわかりやすくプレゼンテーション－」、

「食品業界における研究開発について

－自らのキャリアパスを振り返って－（仮題）」（2/1）

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部

ビジネス人材育成センター 052-747-6490

名大トピックス No.247 平成25年12月16日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

表紙

防災訓練で避難する教職員や
学生

（平成25年10月29日）



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

（<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>）でもご覧いただけます。

140 四高戦と第八高等学校庭球部への応戦状

名大の運動部で、二大学間の本格的な対抗戦といえば、大阪大学との名阪戦ですが、名大旧教養部の前身にあたる第八高等学校（八高）においては、第四高等学校（現在の金沢大学の前身の一つ）との対抗戦、いわゆる四高戦でした。八高と四高は、校名に数字を冠したナンバースクール（全国に8校のみ）のライバルとして、両大学を挙げての対抗戦が毎年おこなわれたのです。八高は、「スポーツ八高」の異名をとるなど、スポーツ活動が盛んな学校として有名でした。

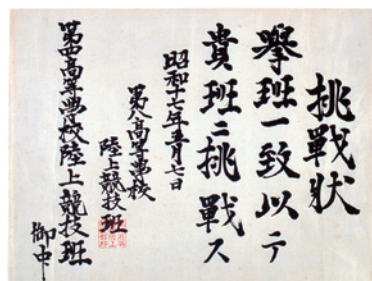
そしてこのたび、この四高戦にまつわる大変珍しい史料が、八高卒業生近藤成泰氏のご子息近藤成寿氏から大学文書資料室に寄贈されました。1930(昭和5)年7月に四高庭球部から八高庭球部へ宛てた応戦状です（写真1）。

八高庭球部は、早くも八高創立2年目の1909(明治42)年に創部されました。当初は軟式でしたが、日本人選手の国際大会での活躍に触発され、東海地方でも硬式テニスがお

こなわれるようになり、1922(大正11)年に名古屋硬式庭球リーグ連盟が結成されると、八高も翌1923年にこれに加盟しました。昭和に入り、八高庭球部は全国に知られる強豪となり、1936(昭和11)年からインターハイで3連覇するなど大活躍しました。八高庭球部は、名大硬式庭球部の前史をいどっています。

これまで、名古屋市博物館が所蔵する、1942年5月の八高陸上競技班から四高陸上競技班への挑戦状は知られていました（写真2）。今回は、こうした挑戦状に対する返事として応戦状というものが送られていたことを示すもので、八高が関係するものとしては、おそらく初めて発見された史料だと思います。

名大の歴史を明らかにする時、教育・研究や大学運営だけではなく、学生生活に関するものも重要な史料となります。そういった史料をお持ちでしたら、ぜひ大学文書資料室までご一報ください。



1	2	3
4	5	6

- 1 四高庭球部から八高庭球部への応戦状(大学文書資料室所蔵、38.8cm × 51.2cm)。この年は、対抗戦が金沢でおこなわれたので、八高が挑戦状を、それをうけて四高が応戦状を出したと思われる。
- 2 八高陸上競技班から四高陸上競技班に宛てた挑戦状(名古屋市博物館所蔵、39.2cm × 52.2cm)。
- 3 名古屋駅前握手を交わす八高と四高の応援団(1935年)。
- 4 応戦状とともに寄贈された、1932年の八高・四高対抗戦のメダル。上部のマークは、右が八高、左が四高の校章。
- 5 左のメダルの裏。
- 6 1937年2月の八高庭球部(1936年度インターハイ優勝記念)。

